

都市被救恤層における投票行動

鎌田とし子

一、はじめに

二、調査の概要

三、支持政党の変遷

△支持の変化▽

△選挙への参加▽

△支持の動機と理由▽

四、各政党への評価

△現在の支持政党を支持する理由▽

△自民党に対する評価▽

△社会党に対する評価▽

△公明党に対する評価▽

五、選挙に影響をもつ媒体

△各党の政策を知る方法▽

△決定に際して影響力をもつ媒体▽

六、選択にはたらく生活意識

△義理人情と家族制度▽

△労働組合とスト意識▽

△生活保護意識▽

七、本人の経歴と親の職業との関係

△本人の最も長く就いた職業▽

△親の職業▽

八、おわりに

一、はじめに

この報告は、さきに刊行された「一人暮らし中高年令者の社会的形成過程」第一部ならびに第二部⁽¹⁾につづく、第三部をなし、彼らの投票行動に関する考察である。したがって、投票行動の分析に先立ち既刊の第一部・第二部の内容について、簡単にふれておかねばならない。

われわれは、第一部において生活保護を受けている中高年單身者が、いかなる理由で、いかなるプロセスを辿って形成されてきたかを考察した。そこには戦争と敗戦という激動の時代をはさみ、戦後はまたドラスチックな経済変動をもなった「高度成長」を生き抜いてきた都市下層労働者・職人の運命が浮彫りにされていた。

それは、まず第一に職業遍歴の激しさとその結果としての不安定階層⁽²⁾への流入である。図1をみると、本人が初めて就いた職業は、もともと安定した職業といえるA層（自営業）二一％、B層（職員）一一％、C層（常雇作業員）一三％は合わせても約半数であったが、生涯を通じての安定職⁽³⁾はほとんど結婚時点の職業と一致するが⁽⁴⁾では三者の合計は二四％に半減し、保護直前にはわずかに一八％に減っていた。これを一生の間に経験した職業の延件数であらわしてみても、三五％でしかなく、半ばをこえる六二％は不安定階層であるD層（不安定職業）とE層（サービス業）で占められていた。ここで不安定職業に分類

した職業とは、表1のごとく建設職人を中心とする雇われ職人、炭鉱夫・沖仲士・船乗り・人夫・失対などの日雇労働者、廃品回収業・行商・屋台などの名目的自営業を含んでおり、低賃金と不規則な就労という点で、まさに相対的過剰人口の一部を構成している。サービス業も同様に、小商店の店員やサービス、女中・子守・付添婦・寮母・仲居・芸者・売春婦等、女子を主とする不安定階層である。

彼らは戦後の産業再編政策の中で、スクラップ化されていく産業からつぎつぎと締め出され、激しい流動を余儀なくされた。また、常雇であった職員・作業員も、敗戦による失職、合理化や倒産による解雇、思想的理由による追放などによって不安定階層に流入し、その後は転々と職業を変えながら生活保護に辿りついたのである。

第二に、明らかにになった点は、こうした激しい職業遍歴の過程で労働力の破壊と家族の解体が目立つことである。彼らの仕事の性格上、労働災害・疾病の頻度は高く、男子の労働災害は二二％、その他のケガ・交通事故二〇％、疾病二九％となっており（いずれも延件数）、これが原因となって労働能力を喪失した者は多い。さらに極度の低賃金ならびに、一家の主人の労働力の破壊・飲酒・放蕩によって家族が長期の極貧状態におかれ、その間に夫婦が離婚・家出するもの、死別するものが相次ぎ、これにともない子を別れた相手方に渡す、養子に出す、ぐれて家出するなどの子の喪失が目立ち、家族は徹底的に解体さ

れていく。一人暮らし中高年令者はこのようにして生み出されてきたのであるが、いま一つのルートとして生涯未婚がある。これは男は飯場ぐらし、女は水商売などの定住しえない職業のために結婚できなかった者の他に、早くに労働能力を失い結婚できなかった者が含まれる。ともあれ、中年単身者はこの階層に特有の現象である。

また、近年の特徴として、子はいるが経済的理由、住宅事情などにより同居しえず、一人暮らしを余儀なくされている老人がふえている。女子に多い事例であるが、子の職業からみて親を養うほどの経済能力をもっていないこともたしかである。

この点については第三で世代的な階層移動としてとりあげるが、いま一つ、僅かではあるが老後の生き方の選択として、一人暮らしをしている人がいる。現在、老人の多くが子と同居することを望んでいるとしても、それを望まない人の自由も認められるべきであり、子との同居ということで社会保障制度の不備をやむやにせず、一人暮らしを選択した老人にも生活の保障が制度的に与えられなければならない。

第三に明らかにされたことは、低い階層内での世代的再生産の事実である。図1によれば親の階層は、最も長く就いた職業において、A層の自営業——そのほとんどは小作農民なのであるが——が四七%で約半数を占めていたが、本人が卒業する時点では早くも四〇%に減り、死亡が一六%でているのである。また、親の世代といえは明治・大正時代が主流であるにもかか

わらず、不安定職とサービス業が、最長職で四二%もある。最も多いのは炭鉱夫、次いで建設職人で、これに常雇であるB層とC層を加えると、約半数はこの時代からの賃金労働者であった。

この小作貧農と都市下層労働者・職人を生家とする本人の学歴は低く、小学校中退さえ男子に五%、女子に二〇%みられ、旧中卒以上は男子・女子共に八%あるのみで、あとは義務教育又は高小卒である。また未成年時、家庭環境も劣悪で、貧困はいうまでもなく、親の離・死別・再婚・連れ子養子の混在、長期の病人・身障者をかかえるなどの、不幸な問題をかかえた家族が多かった。こうした悪条件を背負って出発した本人の職業遍歴については、第一でのべた通りである。

同じ悪循環は、本人の子の世代にまで及ぶことになる。図1で子の現職をみると、すでにD層の不安定職業が七〇%にも達していることがわかるが、男の子で、高校、短大を卒業した者は一三%にすぎず、八七%が義務教育しか受けていないとすれば当然だといえる。彼らは親を扶養するだけの賃金をえていないのである。

調査の結果、およそ以上のような特徴がつかめたのであるが資料を統計的に処理してしまうと、一人ひとりの具体的な生活史が生き生きとした姿で浮び上ってこないという限界が出てくる。この数字と数字の穴を埋めるために調査にあたった各人が、対象となった人たちの生活史を「ケース記録」として再現した

<女>

世 代	親 の 代		→	本 人 の 代				→	子 の 代	
職 業 ・ 階 層 時 点	最長職	卒業時		初 職	安定職	経験職	保護前職		他出時	現 職
A層 自 営 業	64.0	48.0		24.0	16.0	14.3	8.0		5.0	
B層 職 員	4.0			4.0		3.3				5.0
C層 常 雇 作 業 員	8.0	4.0		8.0		7.7	4.0		20.0	20.0
D層 不 安 定 職	20.0			12.0	12.0	15.4	12.0		20.0	10.0
E層 サ ー ビ ス 業		12.0		44.0	32.0	58.2	40.0		5.0	10.0
そ の 他					4.0	1.1				
無職(又は安定職ナシ)		12.0		8.0	36.0		36.0		5.0	
不 明	4.0	8.0							45.0	55.0
死 亡		16.0								
該 当 人 員	25人	25人		25人	25人	25人	25人		20人	20人

注：子の代は、男の子についての数値

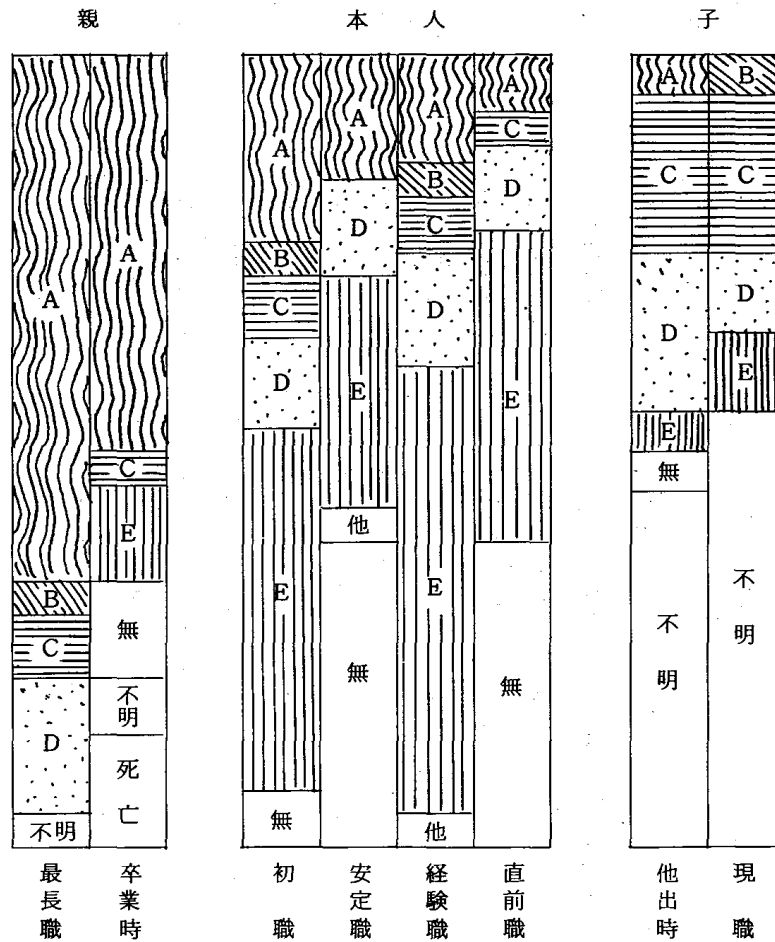
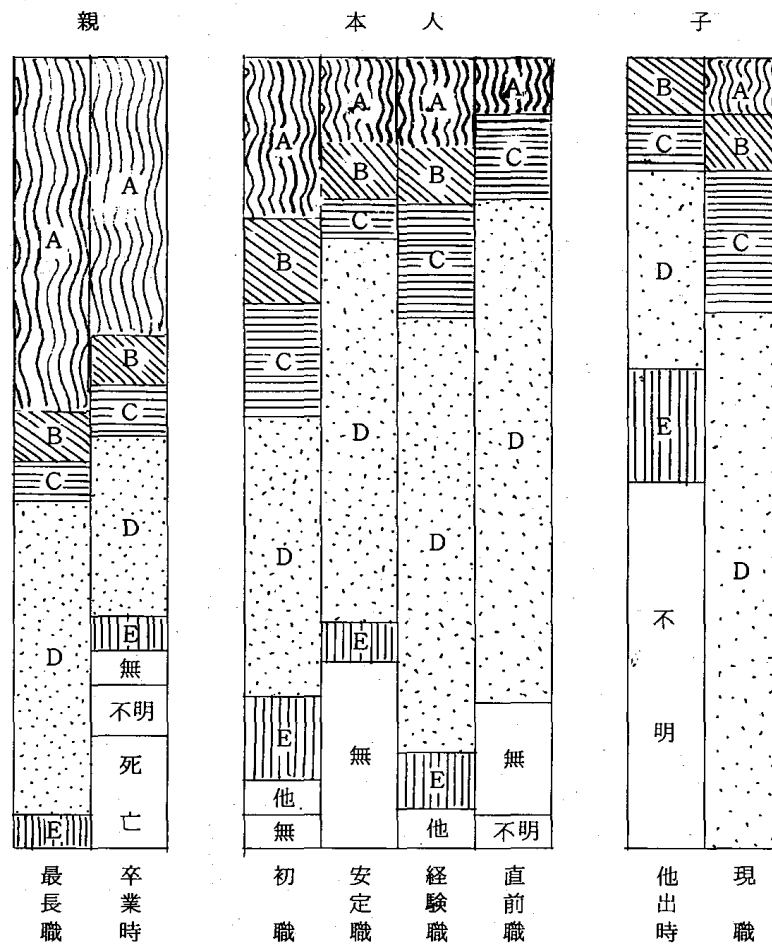


図-1 三世代にわたる社会的移動

<男>

世 代	親 の 代		→	本 人 の 代				→	子 の 代	
職業・階層 時点	最長職	卒業時		初 職	安定職	経験職	保護前職		他出時	現 職
A層 自 営 業	47.4	39.6		21.1	10.5	11.8	7.9			7.7
B層 職 員	5.3	5.3		10.5	7.9	7.9			7.7	7.7
C層 常 雇 作 業 員	5.3	5.3		13.2	5.3	14.8	10.5		7.7	15.5
D層 不 安 定 職	39.5	23.7		36.8	47.4	55.2	65.8		23.1	69.2
E層 サ ー ビ ス 業	2.5	2.5		13.2	5.3	6.9			15.5	
そ の 他				2.6		3.0				
無職(又は安定職ナシ)		2.5		2.6	23.7	0.5	13.2			
不 明		5.3					2.6		46.2	
死 亡		15.8								
該 当 人 員	38人	38人		38人	38人	38人	38人		13人	13人

注：子の代は、男の子についての数値



表一 生涯に経験した職業（延件数）

性 別 階層・職業分類	経 験 職（延数）					
	合 計		男		女	
	実	%	実	%	実	%
合 計	294	100.0	203	100.0	91	100.0
A層 自 営 業 小 計	37	12.6	24	11.8	13	14.3
農 漁 業 焼 業 炭 事 業 主 都 市 自 営 業 飲 食 店 住 師 匠（踊・茶）職	16 1 3 7 10		12 1 3 6 2		4 1 8	
B層 職 員 小 計	19	6.5	16	7.9	3	3.3
専 技 術 職 官 公 庁 事 務 員 大 企 業 事 務 員 中 小 企 業 事 務 員	4 5 10		3 5 8		1 2	
C層 常 雇 作 業 員 小 計	37	12.6	30	14.8	7	7.7
官 公 庁 事 務 員 自 衛 隊 軍 人 大 企 業 労 務 員 中 小 企 業 労 務 員 女 運 転 工 手	5 2 8 14 4 4		5 2 7 12 4		 1 2 4	
D層 日 雇・職 人・不 安 定 職	126	42.9	112	55.2	14	15.4
建 設 設 等 職 人 そ の 他 職 人 日 雇 人 炭 鉦 船 員 失 対 名 業 請 目 的 自 営 負 師・ト バ ク 師	47 7 22 25 1 6 17 1		47 5 20 18 1 5 15 1		2 2 7 1 2	
E層 サービス 業 小 計	67	22.8	14	6.9	53	58.2
看 護 婦・保 母 店 員・サ ー ビ ス 業 女 中・子 守・付 添・寮 母 仲 居・芸 者・売 春 婦	2 22 24 19		14		2 8 24 19	
そ の 他	6	2.0	6	3.0		
不 明	2	0.7	1	0.5	1	1.1

(注) 対象は一人ぐらし世帯で、男子38名、女子25名である。

ものが第二部をなしている。

事例研究に際して注意すべき点は、具体的な事実以外の事情を聴き出す場合にはインタビュアの調査能力に負うところが大きいことである。また対象となった階層の常として「過去の栄光を誇張する」とか、余儀なく転々と職を変えて歩いたにもかかわらず、男の見栄で「放蕩した」とか「氣にくわないから飛び出した」と得意気に話す者がいる。これらに対しては、事実だけを着実にきいていくことによって真実に迫ることが出来るのであるが、調査経験の浅い学生に期待するのは無理である。したがってここではインタビュアのとらえたままを記述し、これをもとにして分析するしかなかった。この点をおことわりしておきたい。

注1. 鎌田とし子「一人暮らし中高年令者の社会的形成過程」

第一部、及び、鎌田とし子他「同ケース記録集」第二部、当研究室。

注2. 貧困研究の第一人者江口英一氏の命名による。

二、調査の概要

およそ以上の諸結果をふまえて第三部の分析に入るのであるが、そのまえに調査の概要をのべておこう。

この調査の目的は、「一人暮らし中高年令者が生み出されてく

る社会的メカニズムを研究する」ところにおかれたことはいうまでもないが、貧困階層における家族が窮乏化の過程で激しく解体していく実態は、すでに一九六五年に実施した室蘭調査で明らかにされており、生活史の分析の方法もかたちを整えていた。今回の福岡調査は、室蘭調査で得た結論、「貧困と家族解体」の関係をいわば検証する役割をもっていた。そしてそれは果された。

ただ室蘭調査で残された疑問の一つに、彼らの存在と意識の問題があった。彼らの生活史は、戦争の犠牲、労働災害、合理化による労働強化と発病、人員整理による一方的な解雇、労働運動への弾圧と追放等々、工業都市であるだけに一そうあらわに収奪のわだちの跡をさらけ出していた。これら産業の犠牲者たちは怒りをもって資本を告発する権利があったし、それを政治的に解決しようとする意識が芽生えても決しておかしくはなかった。にもかかわらず彼らの中には自民党を支持する者が多数見うけられ、その理由をきくと「生活保護を貰って暮らせるのは政府自民党のおかげ」とする者、わけもなく「ずっと自民党に入れてきた」者、明らかに買収された者等、現役の下層労働者よりも革新政党支持率は後退していた。そして他の質問においても彼らの意識の中に腐敗と退廃のカゲを見ないわけにはいかなかった。

つまり存在が意識を直載には規定しない絶好の例なのであるが、この間に介在する幾段階かの認識のプロセスを注意深くさ

ぐっていく作業をくり返すしかないと考えていた。しかし、今回の調査では、極めて困難なこの課題にとりくむ手がかりとして、最も知りたいところをそのままきくことにとどめた。その結果をもとにして徐々に分析の方法をさぐりあてるといふ試行錯誤的なやり方をとったのである。

設問群は、次のようなブロックに分けられる。

- 一、本人の生育歴（親の職業と家族について）
- 二、本人の職業歴（本人の職業遍歴について）
- 三、本人の家族歴（本人の家族の歴史と子の状態について）
- 四、投票行動と本人の意見（投票行動、生活と労働に関する意識、政治意識）

五、現在の生活環境（物質的生活状態、社会関係）

このうち一―三までは室蘭調査で用いられた設問と同じである。そこでは本人の労働と生活上の主要な出来事が語られ、変化の時期と理由が詳細に述べられるようになっていく。ここまでは非常に手間のかかる作業である。

問題はそうした出来事を、本人がどう認識し総括しているかである。認識と判断の過程を経て具体的解決の手段が決定されていくものとすれば、生活の節にあたる出来事についてその人が持っている認識をきき出さねばならない。順序としては、全生活史を語ってもらったあとで、「生涯を振りかえって、生活の歯車が狂い出したと思われる時点はないか。その出来事とは何か。何故そういうことが起ったと思っているのか」をたずね

た。この設問のねらいは、本人が自分の生涯を組上にのせて何らかの総括をしているか、どんな種類の出来事を一生を左右するような出来事とみているか。その理由を個人的なものともっているか社会的なものともみているか。にあり、結局は物事を客観視する能力、科学的な分析能力を観察するところにあった。

この場合、人は応々にして旧い意識にわざわざいわれて、本質を見抜く目をくもらされることがある。旧い意識とは階級関係を隠蔽する方向に働く意識であり、「義理人情」と「家族制度」を用いてみた。逆に促進的意識とは、階級関係を明確化するのに役立つ意識で、「労働組合」と「ストライキ」を用いた。

他方では、選挙に際しての投票行動を調べた。毎回投票しているか。投票していない、あるいは投票しなくなった場合はその時期と理由、支持政党の有無とその変遷、変化した時期とその理由、変わるにあたって影響したものは何か。現在投票している政党を支持する理由等々をたずね、さきの生活史とつき合せてみた。

調査はすべて面接であり、社会学専攻の学生一五名がこれに当たった（阿部あづみ、今市佳代子、上林葉子、尾坂順子、沢田節子、玉田由美子、森本佐知子、浜島真紀、岩見元子、小松陽子、嶋原一栄、早川尚美、鈴木博子、田中千秋―以上東京女子大学社会科学部学生。鎌田明子―北大教育学部生活教育専攻大学院生）。期間は一九七六年一月二二―二四日の三日間、調査対象は福岡市の生活保護世帯七六名である。

調査対象の選定にあたっては、次のような方法によった。すなわち、福岡市東区在住の生活保護世帯のうち調査に協力の得られる全生連（全国生活と健康を守る会）加入者にしほったが、今回の調査が一人暮らしに焦点をあてているので、単身世帯を主としてえらんだ。その際に生れつきの身体障害者や生涯主婦として暮らし、老令になってから夫に先立たれた者等は、当然のなりゆきとして一人暮らしになっているのであるから、これを除き、「主たる生計稼得者として労働に従事したことのある者」をえらんだ。その方が労働と意識との関係もはっきりすると考えたからである。このようにして単身者男子三八名、女子二五名と、家族のある世帯一三名がえらばれた。家族世帯が混っているのは、前述の条件を満たす単身者が少なく、家族と住んでいるといっても治る見込のない病気で夫が入院中であったり、寝たきりであったり、老母と身障者又は病人が住んでいたという、近く一人暮らしになることが予想される世帯ということではえらばれたものである。

対象者の位置を示すために表2をあげる。東区的生活保護受給世帯は、一九七六年一月現在の民生局業務報告によると、二、五二四世帯であるが、うち単身世帯は一、二四九名で世帯の約半数を占めている。また単身者の内訳は、傷病・障害者が五六%で最も多く、次いで高令者（男六五才以上、女六〇才以上）四二%となっている。東区的全生連加入者は、これら全生活保護世帯の二五%にあたる六二八名である。実際には全生

連福岡東支部の会員は、一九七六年一二月現在で八六六世帯であるが、このうち生保を受けている世帯は六二八名で会員の七三%にあたる。残る二三八世帯は、生保を受けたことがあるか、いずれ生保を受けると予想される生保予備軍であり、階層としては同じである。

次に全生連加入の生保世帯六二八名のうち、一人世帯は二一六世帯で三四%になる。これは東区全体の生保世帯の平均である五〇%より少ない。しかし一人世帯を一〇〇としてその内訳をみると、高令者四三%（東区平均四二%）、障害・傷病者五六%（同五六%）、その他一%（同二%）で、東区平均と全く等しい構成を示している。また表2のように調査対象者の構成も高令者の割合がやや高いといどである。

なお、会員の一人世帯のうち最も多いのは傷病者で、二一六名中一一一名、次いで高令者九二名、障害者一〇名、その他三名となっているが、統計上、高令・障害・傷病・その他の順位で上から優先して数えてあるため、実際には重複したハンディキャップを持つ者がほとんどである。

調査対象者の性別・年令別構成は表3に示した。高令者でない男六五才、女六〇才未満で生活保護を受けているのは、すべて傷病・障害者であり、健康ではあるが失業中の者、働いているが収入が少ない者は一人も含まれていない。したがって、マルクスによる受救貧民内部の分類⁽²⁾に従えば、労働能力を失った者（傷病・高令）と寡婦で占められ、本来のルンペンプロレ

2 人 以 上 の 世 帯													
そ の 他		小 計		高 令 者		母 子		傷 病 者 + 障 害 者				そ の 他	
実	%	実	%	実	%	実	%	実	%	実	%	実	%
118	1.0	5,346	47.5	611	5.4	1,329	11.8	2,646	23.5			760	6.8
27	1.1	1,275	50.5	123	4.9	292	11.6	712	28.2			148	5.8
3	0.5	412	65.6	40	6.4	96	15.3	191	30.4			85	13.8
27	2.1												
3	1.4												

福岡市分はS51年11月現在，全生連分はS51年12月現在の人員である。

55 ～ 59		60 ～ 64		65 ～ 69		70 ～ 74		75 ～ 79		80 ～ 84	
実	%	実	%	実	%	実	%	実	%	実	%
9	11.8	17	12.4	14	18.4	11	14.5	5	6.6	2	2.6
6	15.8	9	23.7	5	13.2	6	15.8	1	2.6	1	2.6
		6	24.0	5	20.0	3	12.0	3	12.0	1	4.0
2	25.0	1	12.5	3	37.5	1	12.5			1	12.5
1	20.0	1	20.0	1	20.0	1	20.0	1	20.0		

表一2 調査対象の位置

世帯の種類			単身者世帯							
地区別 世帯類型	合 計		小 計		高令者		傷病者＋障害者			
	実	%	実	%	実	%	実	%	実	%
福岡市 計	11,257	100.0	5,911	52.5	2,643	23.5	3,150	28.0		
うち東区 計	2,524	100.0	1,249	49.5	523	20.7	699	27.7		
うち全生連	628	100.0	216	34.4	92	14.6	121	19.3		
東区単身者＝100			1,249	100.0	523	41.9	699	56.0		
全生連単身者＝100			216	100.0	92	42.6	121	56.0		
調査対象者＝100			63	100.0	31	49.2	32	50.8		

注：全生連会員の分類は，市の分類基準にしたがって独自に行った。なお，

表一3 対象者の年令別構成

年 令 性 別	合 計		35～39		40～44		45～49		50～54	
	実	%	実	%	実	%	実	%	実	%
合 計	76	100.0	1	1.3	4	5.3	7	9.2	5	6.6
男 1人ぐらし	38	100.0			3	7.9	4	10.5	3	7.9
女 1人ぐらし	25	100.0	1	4.0	1	4.0	3	12.0	2	8.0
男 家族世帯	8	100.0								
女 家族世帯	5	100.0								

タリアート（浮浪者・犯罪者・売春婦）と分類された人たちをも若干含んでいるといえる。

このようないくつかの条件をもつ対象であるため、ここにえられる諸結果は当然限定されたものになる。次に今回の対象者の、研究対象としての利点と限界をあげておこう。

まず利点として、第一に一人暮らしの生活保護受給者とは、もはや失う家族さえ持たない、いきつくところまでいきついた人たちであるから、生涯の出来事を振返って総括できる位置にあること、第二にきりぎりのいわば極限状態におかれているから、あいまいな態度では生きられず、何らかの行動に出るべく強制されており、一つの判断を持っているであろうということ、第三に全生連会員という階級的に組織された人たちであるから、一般の人たちには警戒心やためらいがあってはつきり答えて貰えない政治・思想の領域まで突込んできけるということであった。

他方、限界としては生活保護階層全体を代表する対象ではなく、全生連に加入している四分の一の人びとの意見に限られるということである。全生連は問題の解決を社会主義社会の実現に見出しているから、政党としては共産党を支持する団体である。日常的に不断の働きかけがなされている筈であるから、会員の多くは共産党支持にまわっていると考えられる。ただ政党支持の自由を打出しているから、他党の支持者も若干含まれている。

したがってここでは、第一に現在共産党を支持している人たちが、それ以前に何を支持していたか、何を契機としていかなる理由で支持を変えたかを知ることが出来る。第二に都市の底辺に生きる人びと、政治的には無気力・無関心に陥りやすく、腐敗・墮落分子を内に含むこれら救恤層の中に、革新を支持し階級的な自覚を持つ人たちがいるとすれば、何を契機とし、いかなるプロセスを経てそこに到達したのかを知ることが出来る。

資料を処理するにあたっては、一人暮らしと家族と住んでいる人とは置かれている条件がちがうので別に集計した。また家族世帯は世帯主の意見に統一すべきであるが、夫が入院中とか、中風で話が聞きとれない場合には妻の意見をきいたので、女子の方に分類した。そうすると全体の構成は男子は一人暮らし三八名、家族世帯八名、女子は一人暮らし二五名、家族世帯五名となった。

注1. 日高六郎「労働者の政治意識」『思想』三七三号、論文から学ぶところは大きいが、生活史の調査に時間をとられ意識の構造を数量化するところまではいけない。

注2. 『資本論』第一巻第七篇第二三章「資本蓄積の一般的法則」の中で受救貧民の部類は三つに分けられている。

『マルクス・エンゲルス全集』二三のb、八三八―九頁、大月書店。

三、支持政党の変遷

△支持の変化▽

はじめに、対象者の現在の支持政党をみておくと、男子四名の内、共産党三九名、社会党一名、自民党一名で、支持政党なし二名、D・K三名である。女子は三十名中共産党が二五名、公明党一名、自民党一名、D・K三名であり、男女とも現在はほとんどが共産党支持者で占められている。

しかし、若い頃からの支持者「若年時・共」は、男女各々四名いるだけで、あとは途中から支持した人たちである。いま支持政党の変遷別に分類してみると、表4にみられるような多様な組合せがえられる。例えば自―社―共とか、自―公―共とかである。このうち変化しない者、「共のみ」とか「社のみ」と

かがある。この「共のみ」というのは、若い頃からの支持者とちがひ、いつの頃からか投票をはじめ、共産党にしか入れたことがない者である。また「D・K―共」とあるのは、他党に投票したことがあるかどうかかわからなかった者で、あとでわかったことだが、職業柄定住しえず棄権していたが、生保を受けてから投票するようになり共産党を支持しているという者が、六名中五名もいたのである。したがって表中「若年時・共」「共のみ」「D・K―共」の三つは一本に集計してもよかったが、内容を分析してみると性格がちがっていたのでそのまま示すことにした。

次に自―共、自―社―共、自―共などは数が少ないため自民党を支持していたことがある者で、現在は共産党に変わったという意味で一本にし、「自含―共」とした。「諸―自」とい

表一4 支持政党の変遷

				合 計
男 子 合 計				46
一 人 ぐ ら し	小 計			38
	若 年 時 か ら 共			4
	共 の み			4
	社 一 共			13
	D.K 一 共			6
	自 一 社 一 共			1
	社 一 自 一 共			1
	自 一 共			3
	社 一 なし			1
	自 一 社 一 公 一 なし			1
社 の み			1	
D.K			3	
家 族 世 帯	小 計			8
	社 一 共			4
	自 一 社 一 共			1
	自 一 公 一 共			1
	自 一 共			1
	自 の み			1
女 子 合 計				30
一 人 ぐ ら し	小 計			25
	若 年 時 か ら 共			4
	社 一 共			8
	D.K 一 共			3
	社 一 公 一 共			1
	社 一 自 一 共			1
	自 一 共			3
	自 一 公			1
	自 諸 一 自			1
	D.K			3
家 族 世 帯	小 計			5
	社 一 共			3
	D.K 一 共			1
	社 一 公 一 共			1

うのは、いろんな政党に入れたが今は自民党支持である。また社―なし、自―社―公―なしというのは、もとはあったが現在は支持政党なしという意味で、これを一括して「有―なし」と表示した。共通点は二名とも社会党を支持していたことがある。

こうみてくると、若い頃から一貫して共産党支持者であった者は男八・七％、女一三・三％と少なく、途中から支持政党を変えた人がほとんどである。そのうち社会党から共産党に変えた人が最も多く、男子の四一％、女子の三七％がこれにあたる。これは革新支持という下地があつて共産党へと変えた人たちなのであつて革新の範囲内での移動が比較的容易であることを示す。

△選挙への参加▽

現在、男子に三名の無投票者（うち一名は社会党支持者であつたが、レッドパージをうけた後遺症で革新政党不信に陥り、投票するがいつも白紙投票である）と、女子にときどき投票する者二名がいる他は、毎回投票している者ばかりで全体として投票率は高い（表5）。

しかし、もとは投票していなかったが、現在はしているという者が計一四名いる。そして男にそれは多い（男二九％、女三％）。これは職業柄飯場ぐらしを余儀なくされ投票しえなかった者が多く、「D・K―共」の八三％、「社―共」の三九％は生保を受けるようになって投票するようになった者である。

「自含―共」にも四〇％いるが、当時の自民党支持の理由が、

地元代表としてえらんだとか上司に頼まれたとかで、彼らは関心がうすくて投票しなかったものと思われる。

△支持の動機と理由▽

では、いつから現在の支持を決めたのであろうか。つまり直前の支持から現在の支持政党に変えた時点の考察である。

まず、表6と7の下段に、この人たちに共通する大きな生活の転換点―生活保護受給時点をはさんで、政党支持の変化がどのように起つたかを示した。これによると「若年時・共」と「共のみ」は当然生活保護を受ける以前に支持者になっている。しかし、途中から支持を変えた者の多くは、生活保護を受ける前から共産党に投票するようになっている。なかでも「社―共」「D・K―共」は保護以前からの支持者を若干含むのに対し、「自含―共」は一人ぐらしで一〇〇％、家族世帯で六七％の圧倒的多数が保護を契機として共産党に支持を変えている。

女子の場合も生保受給前後が多いが、異なる点は「社―共」に受給後しばらくたって共産党に変えた者が六三％と多いことで、「自含―共」にも二五％みられ、男子にくらべ女子は支持を変えるのに時間がかかっている。

ここで、なぜ生保受給前後に共産党支持に変わる者が多いか調査対象者の語ったところを紹介しておこう。対象者たちは、生保受給にいたる直前に貧困とか傷病による生活の困窮を必ず経験しているが、その段階から全生連の世話役活動が始まっているのである。つまり病気になるとか収入が途絶えるとか、に

表-5 投票の状態

		合 計		投 票 し て い る						し な く な っ た			
				い つ も		と き ど き		不 投 → 投		投 → 不 投		白 紙 投 票	
男 子 合 計		46	100.0	30	65.2			3	28.3	2	4.3	1	2.2
一 人 ぐ ら し	小 計	38	100.0	22	57.9			3	34.2	2	5.3	1	2.6
	若年時・共	4	100.0	4	100.0								
	共 の み	4	100.0	3	75.0			1	25.0				
	社 一 共	13	100.0	8	61.5			5	38.5				
	D・K 一 共	6	100.0	1	16.7			5	83.3				
	自 含 一 共	5	100.0	3	60.0			2	40.0				
	社 の み	1	100.0	1	100.0								
	ありーなし	2	100.0							1	50.0	1	50.0
	D・K	3	100.0	2	66.7					1	33.3		
家 族	小 計	8	100.0	8	100.0								
	社 一 共	4	100.0	4	100.0								
	自 含 一 共	3	100.0	3	100.0								
	自 の み	1	100.0	1	100.0								
女 子 合 計		30	100.0	27	90.0	2	6.7	1	3.3				
一 人 ぐ ら し	小 計	25	100.0	22	88.0	2	8.0	1	4.0				
	若年時・共	4	100.0	4	100.0								
	社 一 共	8	100.0	6	75.0	2	25.0						
	D・K 一 共	3	100.0	3	100.0								
	自 含 一 共	4	100.0	3	75.0			1	25.0				
	社一公一 共	1	100.0	1	100.0								
	自 一 公	1	100.0	1	100.0								
	諸 一 自	1	100.0	1	100.0								
	D・K	3	100.0	3	100.0								
家 族	小 計	5	100.0	5	100.0								
	社 一 共	3	100.0	3	100.0								
	D・K 一 共	1	100.0	1	100.0								
	社一公一 共	1	100.0	1	100.0								

<家族世帯>

自あり→共	社のみ	もとあり→なし	D・K	小 計	社→共	自あり→共	自のみ
5	1	2	3	8	4	3	1
				1	1		
1							
(3)				(4)	(1)	(3)	
				1		1	
2				1		1	
1				2	1	1	
(1)				(3)	(2)		(1)
1				1	1		
				1	1		
				1			1
	1						
		1					
		1	2				
			1				
		1		4	3		1
5				2		2	
				2	1	1	
		1	3				

表一 6 現在の政党を支持するようになった理由（男子）

<1人ぐらし>

		小 計	若い時共	共のみ	社→共	DK→共
合 計		38	4	4	13	6
本をよみ学習+体験		3	2			1
シベリア体験，ロシア人との接触		1	1			
職場の仲間・党員+自分の体験		1	1			
運動に参加，労組で活動		3		1	2	
労働組合が支持していた		1		1		
労働苦・低収入・貧困		2			1	
演説・政党新聞・政見放送で理論的に		1		1		
生保を受けるようになったから 小計		(18)			(10)	(5)
階層別組合の感覚で		4			4	
街頭演説をきいて						
困ったとき世話になり助かった+体験的批判		2			2	
全生連の世話になり，力づくよく思う		10			3	5
義理で，試しに，役に立つ		2			1	
人のすすめ 小計		(2)		(1)		
議員の人柄（世話役活動+演説内容）		1				
世話になる人のすすめ		1		1		
親・兄弟・夫のすすめ，影響						
近所の人のすすめ						
人物本位人脈で決定						
片山内閣以来支持		1				
ページで不信感・白紙投票		1				
無関心（もとから人のいうまま）		3				
D・K		1				
時 期	生 保 以 前	11	4	3	2	1
	生 保 前 後	19			10	4
	生 保 以 後	1			1	
	D・K	6		1		1

<家族世帯>

社一公一共	自 → 公	etc → 自	D・K	小 計	DK 一 共	社 → 共	社一公一共
1	1	1	3	5	1	3	1
(1)				(5)	(1)	(3)	(1)
					1	1	
				1		1	
1				1			1
				1		1	
	(1)	(1)	(2)				
	1	1					
			2				
			1				
	1			2		1	1
1				2		2	
		1	3	1	1		

表一 現在の政党を支持するようになった理由（女子）

<1人ぐらし>

	小 計	若 共	社 一 共	DK 一 共	自 有 り 一 共
合 計	25	4	8	3	4
本をよみ学習+体験					
シベリア抑留、ロシア人との接触+体験	1	1			
職場の仲間・党員+体験					
運動に参加・労組で活動	1	1			
労働組合が支持していた	1		1		
労働苦・低収入・貧困					
演説・政見放送・政党新聞で理解					
生保をうけるようになったから 小計	(12)		(6)	(3)	(2)
階層別組合の感覚で					
街頭演説をきいて					
困ったとき世話になり助った+体験的批判	3		3		
全生連の世話になり、すすめられて	5		3		1
義理で、役に立つ、試しに	4			3	1
人のすすめ 小計	(9)	(2)	(1)		(2)
議員の人柄（世話役活動+演説内容）	2		1		1
世話になる人のすすめ					
家族のすすめ・影響	3	2			1
近所の人のすすめ	2				
人脈・人物で決める	2				
片山内閣以来の支持					
ページで不信感・白紙投票					
無関心（もともと人のいうまま）					
D・K	1				
時 期	生 保 以 前	5	4		
	生 保 前 後	7		3	2
	生 保 以 後	6		5	1
	D・K	7			1

っちもさっちもいかな状態に追いこまれ、市の福祉事務所に死ぬ思いで保護の申請にいくが、あれこれ厭味をいわれらちがあかない。当時支持していた政党の事務所にも生活相談にいくがここでも冷たくあしらわれ、何の力にもなって貰えない。途方にくれているところで、親身になって世話をしてくれる全生連があると聞かされる。親類縁者からは早くに見放され、行政からも突き放され、政党も頼りにならないことを知った困窮者が、最後ののぞみをかけて訪れるところ、それが全生連の事務所なのである。

この全生連の会長は、戦後早くにレッドパージで九州の炭鉱を追われた。当時パージで追われた者はどの企業にも再就職は出来ず、失対人夫になるか、生活保護を受けるしかなかった。

仕事を与えないやり方に憤慨したこの人は、抗議のかたちとして生活保護を受ける方をとった。以来、福岡市の下町で生保受給者の組織活動を始め、今日では日本でも最強の全生連支部をつくり上げた。尚、パージの際の革新政党への不信から、この人自身は党籍を持たないとも聞いたが、実際には党員以上の活動をしており、それも一つの抗議であろうかと思った。ともあれ東区だけで現役の下層労働者を一部に含む八六六世帯（内生保は七三％）を組織しているのである。

さて、全生連事務所には、会長の言葉をかりれば「どうしようもない人」が駆け込んでくる。そこで医療保護なり生保なりを受けさせるべく本人と共に市の福祉事務所にかけ合いにいく。

しかし知られているように、行政の側としては予算にしばられているから容易に認めようとしない。そういう時、ねばりにねばり、激しく応酬しながらとれるまで引下がらないのがこの人のやり方で、役人の前で小さくなってもものも言えなくなっている本人に代って、堂々とわたり合ってくれる姿が、いかに頼もしいかは想像できる。

つぎに説明する政党支持の理由の中で「困ったとき世話になり助った」とか「力強い」とあるのは、その時の感謝と信頼の気持があらわれている。

さて、次に現在の政党を支持するようになった理由―それは契機をも同時に含むものであるが―をさぐってみよう。

表6と7は、本人が語ったところを整理したものである。これによると「若年時・共」の男子四名は、若い頃社会主義文献に接し理論的に支持するようになった者二名、シベリア抑留中、ロシア人が人種差別をしなかったことに感銘し社会主義を支持するようになった者一名、現役時代職場の仲間から話を聞き社会主義の正しさを知った者一名で、共通しているのは理論が先行している点である。しかしそれと同時に自分の体験で正しさを証明していくプロセスが同時に見受けられる。表8は、観察者が客観的に対象者の生涯をみて、何が原因で生活の歯車が狂い出したのかを判定したものであるが、この四名は、戦争による犠牲（妻子の消息不明）、労働災害、職業の性格、思想対立

(治安維持法違反) といった社会的な原因であり、思想と体験が結びついてゆるがぬ支持になったものと思われる。したがってこの人たちは、一名を除いて、今日の不遇をまねいたのは社会的原因であると総括している。残る一名とは、客観的にみれば労働災害が原因なのであるが、主観的には妻の不貞で離婚したことをあげている者である。

この点女子は少しちがっている。若い時から共産党支持者だった四名のうち、二名までが親や兄の思想的影響を受けている。表9は親・兄弟の支持政党をきいたものであるが、戦前にまたがるので不明が多いのは当然として、社・共支持者は特異な記憶として全部答えられている筈である。これによると親ないしは兄が共産党支持者であったことがわかる。残る二名は看護婦として満州で働いたことがあり、ロシア人にも接しロシア語を習ったのが社会主義に親しむ契機となった者と、労働組合でストに積極的に参加したことが契機になった者である。

またこの四人は、客観的にみると戦争被害、親の犠牲、身体的欠陥、結婚運が悪かった者で大変な苦労を経験した人ばかりで一人を除くと主観的には個人的理由で今日の不遇をまねいたとしている。親の犠牲というのは小作貧農の貧困が原因であることが多いし、結婚運の悪さは応々にして夫の職業の性格から来るものが多い。しかし、現象的には親が悪いとか己れの不運としかうつらず、社会的な視野で総括することは理論的な素養がないために困難なようである。

次に「共のみ」というのは、男子にのみ四名ある。この人たちは、労働組合で運動に参加したことが契機となった者一名、労働組合(全日自労)が社・共を支持していたのでというのが一名、街頭演説や政党新聞に接して理論的に理解できた者一名、世話をしてくれる人がすすめた一名となっており、最後の一名を除くと運動の中で思想を体得したとか教育宣伝をうけて理解を深めたとかオーソドックスなプロセスをへて共産党支持に達している。当然支持の時期も生保以前が三名であった。またこの四名は、不遇の原因が職業の性格二名、子の経済力一名、自分の責任一名とみなされるのに、自分の人生を総括して社会の側に責任があるといえたのは一名にすぎず、三名はわからないとしていて、さきの若年時からの支持者と対象的である。そこまでの分析能力を持たないのがちがっている点である。

次に最も多い「社・共」については、次のようなことがいえる。男子一人ぐらし一三名をみると、労働の運動に参加して共産党支持に変わった者が二名、貧乏になって支持するようになった者が一名ある他は、生保をうけるようになったからという理由が一〇名をも占める。つまり保護以前から共産党を支持していた者は二名にすぎず、残りは全員社会党を支持していたわけだが、変えた理由をさらにこまかくみると、「困ったとき世話になり助かった+社会党事務所へ行っても何の役にも立たなかった」という者二名、「全生連の世話になり、頼もしく思った」が三名、「全生連の世話になっっているので義理で」が一名と、

身体的欠陥		結婚運		子の経済力		本人の責任		老令・病気		個人的		社会的		D・K	
2	4.3	1	2.2	3	6.5	10	21.7	5	10.9	23	55.0	15	33.6	8	17.4
2	5.3	1	2.6	2	5.3	9	23.7			19	50.0	12	31.6	7	18.4
										1	25.0	3	75.0		
				1	25.0	1	25.0			1	25.0			3	75.0
1	7.7	1	7.7			4	30.8			8	61.5	4	30.8	1	7.7
						1	16.7			1	16.7	3	50.0	2	33.3
				1	20.0	2	40.0			4	80.0			1	20.0
						1	100.0			1	100.0				
												2	100.0		
1	33.3									3	100.0				
				1	12.5	1	12.5	5	62.5	4	66.7	3	37.5	1	12.5
				1	25.0	1	25.0	2	50.0	3	75.0	1	25.0		
								2	66.7	1	33.3	1	33.3	1	33.3
								1	100.0			1	100.0		
2	6.7	9	30.0	11	36.7	2	6.7	1	3.3	21	70.0	7	23.3	2	6.7
2	8.0	8	32.0	10	40.0					19	76.0	4	16.0	2	8.0
1	25.0	1	25.0							3	75.0	1	25.0		
1	12.5	3	37.5	3	37.5					7	87.5	1	12.5		
		1	33.3	2	66.7					3	100.0				
		2	50.0	1	25.0					2	50.0	2	50.0		
				1	100.0					1	100.0				
				1	100.0					1	100.0				
										1	100.0				
		1	33.3	2	66.7					1	33.3			2	66.7
		1	20.0	1	20.0	2	40.0	1	20.0	2	40.0	3	60.0		
				1	33.3	2	66.7			1	33.3	2	66.7		
								1	100.0			1	100.0		
		1	100.0							1	100.0				

表-8 生活がうまくいかなかった原因

		合 計		戦争被害		労働災害		職業の性格		思想対立		親の犠牲	
男 子 合 計		46	100.0	5	10.9	8	17.4	9	19.6	3	6.5		
一 人 ぐ ら し	小 計	38	100.0	4	10.5	8	21.1	9	23.7	3	7.9		
	若年時・共	4	100.0	1	25.0	1	25.0	1	25.0	1	25.0		
	共 の み	4	100.0					2	50.0				
	社 一 共	13	100.0			2	15.4	4	30.8	1	7.7		
	D・K一 共	6	100.0	1	16.7	2	33.3	2	33.3				
	自 含 一 共	5	100.0	1	20.0	1	20.0						
	社 の み	1	100.0										
	有 一 なし	2	100.0			1	50.0			1	50.0		
	D・K	3	100.0	1	33.3	1	33.3						
家 族	小 計	8	100.0	1	12.5								
	社 一 共	4	100.0										
	自 含 一 共	3	100.0	1	33.3								
	自 の み	1	100.0										
女 子 合 計		30	100.0	2	6.7							3	10.0
一 人 ぐ ら し	小 計	25	100.0	2	8.0							3	12.0
	若年時・共	4	100.0	1	25.0							1	25.0
	社 一 共	8	100.0									1	12.5
	D・K一 共	3	100.0										
	自 含 一 共	4	100.0									1	25.0
	社一公一 共	1	100.0										
	自 一 公	1	100.0										
	諸 一 自	1	100.0	1	100.0								
	D・K	3	100.0										
家 族	小 計	5	100.0										
	社 一 共	3	100.0										
	D・K一 共	1	100.0										
	社一公一 共	1	100.0										

注 個人的か社会的かは本人の判断による。

	兄 弟				
D . K	自 民 党	社 会 党	共 産 党	共・好意的	D . K
27	4	6	1	1	34
21	4	5	1	1	27
1				1	3
4					4
5	2	3	1		7
3		1			5
3	2	1			2
1					1
1					2
3					3
6		1			7
2		1			3
3					3
1					1
23	1	1	6		22
18	1	1	6		17
2			1		3
6		1	2		5
1			1		2
3	1		1		2
1			1		
1					1
1					1
3					3
5					5
3					3
1					1
1					1

表－9 親・兄弟の支持政党

		合 計	親			
			自 民 党	社 会 党	共 産 党	共 ・ 好 意 的
男 子 合 計		46	9	8	1	1
一 人 ぐ ら し	小 計	38	9	7		1
	若年時・共	4	2			1
	共 の み	4				
	社 一 共	13	3	5		
	D・K一共	6	3			
	自 含 一 共	5	1	1		
	社 の み	1				
	有 一 なし	2		1		
	D・K	3				
家 族	小 計	8		1	1	
	社 一 共	4		1	1	
	自 含 一 共	3				
	自 の み	1				
女 子 合 計		30	2	3	2	
一 人 ぐ ら し	小 計	25	2	3	2	
	若年時・共	4	1		1	
	社 一 共	8		1	1	
	D・K一共	3	1	1		
	自 一 共	4		1		
	社一公一共	1				
	自 一 公	1				
	諸 一 自	1				
	D・K	3				
家 族	小 計	5				
	社 一 共	3				
	D・K一共	1				
	社一公一共	1				

支援のニュアンスは多少ちがうが助けて貰ったことへの謝礼の意味合いがつよい一群と、階層別組合の感覚で生保階層となつたからその組合である全生連Ⅱ共産党へ変つたという一群がある。そもそも社会党支持者たちの約半分はかつての組織労働者であつた。だから現役時代は社会党、生保になつたら全生連という、階層別組織として支持したのである。組織労働者としての体験が、組織の重要性を教え込んだためと考えられる。労働組合に加入していたかどうかについては表10に示してある。

同じ「社―共」でも、家族世帯の理由は若干異なり、議員の人柄とか世話になる人のすすめとか、属人的な契機が半数を占める。概して家族世帯は、ぎりぎりのところまで追い込まれた一人ぐらしとくらべてまだ余裕が感じられる。また女子も、生保を受けるとき助けて貰つたことが直接的契機で、それも受けてからかなり経つてようやく共産党に票を入れるようになるという消極的なものである。

また「社―共」の不遇の原因は多様で、職業の性格・労働災害・思想的対立といった社会的なものと、本人の責任が相半ばする。明確な特徴が見出せないのである。これを反映して自ら社会的原因だと総括できた者は、男子一人ぐらしで三一%、家族世帯で二五%と少ない。

さらに「D・K―共」というのは、男の場合職業柄定住しえず棄権していたが、傷病にあい生保を受ける前後になつて投票を始め、共産党を支持している者だとのべた。この男子六名の

うち一名は社会主義文献から入っているが、残りは全員全生連の世話になり、その力強さに魅了された人たちである。大体この人たちの中に一度は労働組合に入つたことのある人が三名いる。転々としてあるく職業柄、加入は短期間ではあつたが、ストライキ参加経験者ばかりで組織の力強さを身をもって体験している。そうした素地があつて定住という条件が与えられたとき、熱心な全生連信奉者となつたものと思われる。それは八三%までが赤旗購読者であることもみてわかる。

その上、彼らは客観的にも戦争被害者一名、労働災害二名、職業の性格二名と、八三%までが社会的原因により生活を破壊されている。そして三名五〇%がそれを正しく認識している。これは恐らく全生連に入ってから学習により認識したものと思われるが、棄権をしていた者が共産党支持に直結する典型的な例である。

次に「自含―共」というのは、対極である保守党支持者だった人の場合で、最も共産党支持が困難とみられる例である。男子一人ぐらしに五名、家族世帯に三名、女子一人ぐらしに四名の計一二名いる。このうち三名二五%は以前は余り投票しなかつた人であるから、政治的に無関心派であつたろう。また毎回投票していた人も当時自民党に入れていた理由が、その人の地盤だつたとか、上司に頼まれたとか、妾時代のダンナが代議士だつたとか、積極的な理由があつて支持したわけではない。したがつて自民党を支持しなくなつた理由も、変りばえしないとい

表-10 労働組合への加入

		合 計	あ り	な し
男 子 合 計		46	23	23
一 人 ぐ ら し	小 計	38	20	18
	若 年 時 ・ 共	4	2	2
	共 の み	4	3	1
	社 ー 共	13	6	7
	D・K ー 共	6	3	3
	自 含 ー 共	5	2	3
	社 あ り	1	1	
	有 ー なし	2	2	
	D・K	3	1	2
家 族	小 計	8	3	5
	社 ー 共	4	2	2
	自 含 ー 共	3		3
	自 の み	1	1	
女 子 合 計		30	7	23
一 人 ぐ ら し	小 計	25	6	19
	若 年 時 ・ 共	4	3	1
	社 ー 共	8	2	6
	D・K ー 共	3		3
	自 含 ー 共	4	1	3
	社 ー 公 ー 共	1		1
	自 ー 公	1		1
	D・K ー 自	1		1
	D・K	3		3
家 族	小 計	5	1	4
	社 ー 共	3	1	2
	D・K ー 共	1		1
	社 ー 公 ー 共	1		1

か他に頼まれたとかで、何となく変えてしまっている。

大体この人たちは組織労働者だった人は少く、共産党支持の契機も生保を受けたからという簡単な理由で、それも全生連は役に立つという実利的なものである。しかも本当に有難かったというよりも頼まれたので義理で入れるとか、試しに入れてみたとか、不信心を持ったままの投票である。それともう一つ面白いことは、この人たちに属人的な支持が多いことである。男子家族世帯に一名と、女子一人ぐらしにも一名の現自民党支持者がいるが、二名共土建屋の人脈だとか近所の人のすすめで投票している。したがって共産党に入れるのも思考方法は同じで議員の人柄にひかれたり、世話になる人がすすめるからなのである。また公明党の聖教新聞を購読している人は男に計二名いるが、二名共「自含―共」の人である。当然かもしれないが、こうした政治感覚のもとでは戦争被害、労働災害などが原因で不遇になった人が含まれていても、その原因を個人的なものとしかみていない。

「社―公―共」というのは女子に二名ある。これは生活に困ったとき公明党が何の役にも立たなかったから共産党支持に変わったので、一名は聖教新聞をいまだにとっている。かつて公明党に投票していた理由は夫の親方のすすめで夫と共に入っていたとか、年金制度を有利にしてやるというので一度入れてみたが変らなかったというもので、公明党には立派な人が多いと評価する一方で、共産党は中国のような貧富のない社会を实

現してくれるとか、捨身で貧乏人の生活を守ってくれる唯一の党だとか期待を寄せていてまだ流動的である。不遇の原因は、子の経済力と結婚運（夫の職業の性格からきている）にあるのだが、二名共これを個人的なものともみている。

四、各政党の評価

△現在の支持政党を支持する理由▽

さきに他党から共産党への支持の変化が、生保受給前後に集中しているとのべたが、その党が究極の目的としていかなる社会の実現を目指しているのか、それが自分が抱えている問題の解決にどうつながっているのかを理解したうえでの支持なのであろうか。

表11は、共産党に対する評価で、同党の支持者にとってはその党を支持する理由でもある。実利的肯定というのは、われわれの生活を守ってくれる、貧乏人の味方、頼りになる、一番身近かな政策をとってくれる。実際に役に立つ、親切で真から骨を折ってくれる等々、生保受給前後のいきさつとかかわる「……してくれ」から支持するというものである。全体の中ではこれが最も多く、男子の六一%、女子の五〇%を占めている。そして男女とも一人ぐらしよりは家族世帯にその理由は多い。また支持政党変化別にみると男子では「自含―共」と「社のみ」

は一〇〇%この理由で、「D・K―共」「社―共」も六〇%代であるからかなり多い。これに対し理論的肯定というのは、社会主義社会とはどういう社会かを知っており、その実現をはかる党として共産党を支持するというもので、「若年時・共」には七五%と最も多く、次いで「共のみ」二五%、「社―共」一五%となっている。また感情的肯定というのは「好き」という理くつのないもので「共のみ」、「社―共」「D・K―共」に若干あり、感情的不信とは「赤はこわい」というもので女子にのみ二名いる。

こうみてくると共産党を支持するといっても社会主義さえわかっていない者が大半で、さしせまった生活要求を満たしてくれる政党として期待しているのである。それだけに別の政党の示す利害にも動く可能性は十分ある。しかし支持層を(1)よくわからずに、習慣、感情、勧誘などによって投票する層。(2)生活要求と結びつけて投票する層。(3)理想社会の実現まで展望して投票する層の三層に分けるならば、(2)とは足を地につけた共産党支持者といえるであろうし、そこから(3)へとすすみえた者のみがゆらぐことのない本物の支持者になるのであろう。

△自民党に対する評価▽

ところで他党に流れる可能性は、それぞれの党に対する評価にあるていどあらわれる。表12は自民党に対する評価をきいたものであるが、感情的否定「きらい」はあっても肯定「すき」は全くない。実利的にも一室の評価「戦後の混乱期によくやつ

た」とする者が若干みられるのだけで、実利的否定「役に立たない」「貧乏人の味方ではない」は非常に多い。そしてそれと同じくらい理論的否定が出てくる。この場合理論的否定とは自民党が「資本家の党」であること、折からロッキード問題が起っていたこともあって、大資本と政界のゆ着、腐敗の構造に言及した者である。この数は、他のどの政党の場合におけるよりも高く、今後この人たちが自民党に流れることはまず考えられない。尚表中その他とは、長期的低落傾向をのべ「再び戻るまい」と答えた者、無関心とは「自民党には関心がない」とする否定の意味である。

△社会党に対する評価▽

その点同じ革新政党である社会党に対しては、一定の評価を与える者が多い。(表13)その内容は「まあまあで、貧乏人にはよいことをしてくれる」「共産党には一番近い」「約束は果してくる」などであるが消極的な「よしまし」の意味である。さらに実利的否定「あってなきが如し」「口さきだけ」という批判、感情的否定もかなり多い。それはかつて社会党を支持していた者に多く、ぱっとしないのでいやげがさしたのである。それでいて当時話題になった連合政権構想について、どの党が連合するのがよいかを問うたところ「社―共」のみがこれに回答し、社共連合がよいとする者が、男に五名あった。

理論的に肯定している者は男女とも四名づついる。これは現役労働者の党だとするもので、科学的にとらえている。これに

情 的		理論的肯定		D . K	
不 信					
		6	13.0	8	17.4
		6	15.8	7	18.4
		3	75.0		
		1	25.0	1	25.0
		2	15.4	1	7.7
				1	16.7
				2	100.0
				2	66.7
				1	12.5
				1	100.0
2	6.7	6	20.0	6	20.0
2	8.0	5	20.0	6	24.0
		1	25.0		
2	25.0	2	25.0		
		1	25.0	1	25.0
		1	100.0		
				1	100.0
				1	100.0
				3	100.0
		1	20.0		
		1	33.3		

表一11 現在の支持政党を支持する理由

		合 計		実利的肯定		感	
						肯	定
男 子 合 計		46	100.0	28	60.9	4	8.7
一 人 ぐ ら し	小 計	38	100.0	21	55.3	4	10.5
	若 年 時 ・ 共	4	100.0	1	25.0		
	共 の み	4	100.0	1	25.0	1	25.0
	社 一 共	13	100.0	8	61.5	2	15.4
	D・K 一 共	6	100.0	4	66.7	1	16.7
	自 含 一 共	5	100.0	5	100.0		
	社 の み	1	100.0	1	100.0		
	有 一 なし	2	100.0				
	D・K	3	100.0	1	33.3		
家 族	小 計	8	100.0	7	87.5		
	社 一 共	4	100.0	4	100.0		
	自 含 一 共	3	100.0	3	100.0		
	自 の み	1	100.0				
女 子 合 計		30	100.0	15	50.0	1	3.3
一 人 ぐ ら し	小 計	25	100.0	11	44.0	1	4.0
	若 年 時 ・ 共	4	100.0	3	75.0		
	社 一 共	8	100.0	4	50.0		
	D・K 一 共	3	100.0	2	66.7	1	33.3
	自 含 一 共	4	100.0	2	50.0		
	社 一 公 一 共	1	100.0				
	自 一 公	1	100.0				
	D・K 一 自	1	100.0				
	D・K	3	100.0				
家 族	小 計	5	100.0	4	80.0		
	社 一 共	3	100.0	2	66.7		
	D・K 一 共	1	100.0	1	100.0		
	社 一 公 一 共	1	100.0	1	100.0		

感情的否定		理論的否定		その他		無 関 心		D . K	
7	15.2	11	23.9	2	4.3	6	13.0	8	17.4
6	15.8	9	23.7	1	2.6	6	15.8	6	15.8
		2	50.0						
2	50.0	2	50.0						
2	15.4	2	15.4			1	7.7	3	23.1
1	16.7	1	16.7			1	16.7	1	16.7
1	20.0	1	20.0	1	20.0	1	20.0		
		1	100.0						
						2	100.0		
						1	33.3	2	66.6
1	12.5	2	25.0	1	12.5			2	25.0
1	25.0	2	50.0					1	25.0
				1	33.3				
								1	10.0
5	16.7	6	20.0			4	13.3	8	26.7
4	16.0	4	16.0			3	12.0	8	32.0
		1	25.0					1	25.0
		2	25.0			2	25.0	1	12.5
2	66.7							1	33.3
1	25.0	1	25.0			1	25.0	1	25.0
1	100.0								
								1	100.0
								3	100.0
1	16.7	2	33.3			1	16.7		
		1	33.3			1	33.3		
1	100.0								
		1	100.0						

表-12 自民党に対する評価

		合 計		実 利 的			
				一定の評価		否 定	
男 子 合 計		46	100.0	1	2.2	11	23.9
一 人 ぐ ら し	小 計	38	100.0			10	26.3
	若 年 時 ・ 共	4	100.0			2	50.0
	共 の み	4	100.0				
	社 一 共	13	100.0			5	38.5
	D・K 一 共	6	100.0			2	33.3
	自 含 一 共	5	100.0			1	20.0
	社 の み	1	100.0				
	有 一 なし	2	100.0				
	D・K	3	100.0				
家 族	小 計	8	100.0	1	12.5	1	12.5
	社 一 共	4	100.0				
	自 含 一 共	3	100.0	1	33.3	1	33.3
	自 の み	1	100.0				
女 子 合 計		30	100.0	2	6.7	5	16.7
一 人 ぐ ら し	小 計	25	100.0	1	4.0	5	20.0
	若 年 時 ・ 共	4	100.0			2	50.0
	社 一 共	8	100.0	1	12.5	2	25.0
	D・K 一 共	3	100.0				
	自 含 一 共	4	100.0				
	社 一 公 一 共	1	100.0			1	100.0
	自 一 公	1	100.0				
	D・K 一 自	1	100.0				
	D・K	3	100.0				
家 族	小 計	5	100.0	1	16.7		
	社 一 共	3	100.0	1	33.3		
	D・K 一 共	1	100.0				
	社 一 公 一 共	1	100.0				

<公明党>

D・K		実 利 的				感 情 的				理論的		無関心		D・K	
		一定の評価		否 定		否 定		宗教批判		否 定					
7	15.2	1	2.2	4	8.7	12	26.1	13	28.3	5	10.9	4	8.7	6	13.0
5	13.2	1	2.6	4	10.5	11	28.9	9	23.7	4	10.5	4	10.5	4	10.5
						2	50.0	1	25.0	1	25.0				
2	50.0					1	25.0	1	25.0	1	25.0			1	25.0
1	7.7	1	7.7	1	7.7	3	23.1	3	23.1	2	15.4	2	15.4		
1	16.7			2	33.3	3	50.0							1	16.7
						1	20.0	3	60.0			1	20.0		
								1	100.0						
				1	50.0							1	50.0		
1	33.3					1	33.3	4						2	66.7
2	25.0					1	12.5	2	50.0	1	12.5			2	25.0
1	25.0							2	66.7	1	25.0			1	25.0
						1	33.3								
1	100.0							9	30.0					1	100.0
9	30.0	3	10.0	3	10.0	3	10.0	6	24.0	1	3.3	3	10.0	6	20.0
7	28.0	3	12.0	2	8.0	3	12.0	2	50.0	1	4.0	2	8.0	6	24.0
1	25.0					1	25.0	3	37.5	1	25.0				
1	12.5	1	12.5	1	12.5							1	12.5	2	25.0
1	33.3					1	33.3	1	25.0			1	33.3	1	33.3
1	25.0			1	25.0	1	25.0								
		1	100.0												
		1	100.0												
3	100.0							3	60.0					3	100.0
2	40.0			1	20.0			2	16.7			1	20.0		
								1	100.0			1	33.3		
1	100.0														
1	100.0			1	100.0										

表-13 社会党と公明党に対する評価

<社会党>

	合 計		実 利 的				感情的		理 論 的				無関心	
			一定の評価		否 定		否 定		肯 定		否 定			
男 子 合 計	46	100.0	11	23.9	7	15.2	10	21.7	4	8.7	4	8.7	3	6.5
小 計	38	100.0	9	23.7	7	18.4	8	21.1	3	7.9	3	7.9	3	7.9
若 年 時 ・ 共	4	100.0	2	50.0	2	50.0								
共 の み	4	100.0	1	25.0	1	25.0								
社 一 共	13	100.0	2	15.4	3	23.1	2	15.4	1	7.7	3	23.1	1	7.7
D・K 一 共	6	100.0	1	16.7			3	50.0	1	16.7				
自 含 一 共	5	100.0	3	60.0	1	20.0							1	20.0
社 の み	1	100.0							1	100.0				
有 一 なし	2	100.0					1	50.0					1	50.0
D・K	3	100.0					2	66.7						
小 計	8	100.0	2	25.0			2	25.0	1	12.5	1	12.5		
社 一 共	4	100.0	2	50.0					1	25.0				
自 含 一 共	3	100.0					2	66.7			1	33.3		
自 の み	1	100.0												
女 子 合 計	30	100.0	5	16.7	3	10.0	5	16.7	4	13.3	2	6.7	2	6.7
小 計	25	100.0	5	20.0	2	8.0	5	20.0	2	8.0	2	8.0	2	8.0
若 年 時 ・ 共	4	100.0	1	25.0							2	50.0		
社 一 共	8	100.0			2	25.0	3	37.5	1	12.5			1	12.5
D・K 一 共	3	100.0	1	33.3									1	33.3
自 含 一 共	4	100.0	1	25.0			2	50.0						
社 一 公 一 共	1	100.0							1	100.0				
自 一 公	1	100.0	1	100.0										
D・K 一 自	1	100.0	1	100.0										
D・K	3	100.0												
小 計	5	100.0			1	20.0			2	40.0				
社 一 共	3	100.0			1	33.3			2	66.7				
D・K 一 共	1	100.0												
社 一 公 一 共	1	100.0												

対し理論的否定とは、逆に組織労働者の党であるゆえに総評の上にあぐらをかき、労働者階級全体の代表であることを忘れ、自民党と同じ派閥争いにあけくれているという手痛い批判で、男子ではかつての社会党支持者、女子では「若年時・共」に見うけられる。

△公明党に対する評価▽

公明党が同じ階層に支持者を多く持つことから、両党にまたがる流動的な支持者が多いことが予想されたが、かつて公明党に入れたことのある人は男子に二名、女子に四名で、現在も支持しているのはうち女子の一名で、意外に少なかった。

それどころか公明党を感情的に嫌う者がきわめて多く、肯定の内容を宗教に向けているものとただ嫌うものとに分けてみると、前者の方が多かった。(表13) つまり仏壇にまで手をつけ強引に折伏するやり方、勧誘のしつこさをあげる者が多く、その嫌い方は一度は経験したことのある者の実感をもつ否定であった。

また理論的否定というのは、政党と宗教集団を混同し、中間政党などといって実は自民党と手を結んでいるという批判で、男子に四名、女子に二名あった。

しかし一定の評価を与える者も男に一名、女に三名おり、団結力には感心する、社会党よりはまし、立派な人が多いなど、流動の可能性は若干残っているといえよう。

最後に民社党に関しては、全員が無関心で評価すら与えよう

としなかった。これは大企業労働者だった者がいないことから同盟系組合のあることすら知らないのではないかと思われる。当時新自由クラブがはなはなしく登場していたので、これについては知っており、自民党とはちがったよいことをするのはないかと期待する者も多かったが、関心の持ち方は単なる興味であった。

五、選択に影響力をもつ媒体

△各党の政策を知る方法▽

これまでの分析を通じて、対象者の年令から推して、一般の老人よりは政治的関心がかなり高いことに気づかれたであろう。その理由の一つは地域性にあり、一つには政党の働きかけがある。

全生連福岡東支部事務所のある馬出地区は封建時代藩に馬を供給する町であったようで、この地域はその当時から都市下層社会を形成していたと思われる。そこには部落民も住んでおり、戦前から部落解放運動がさかんな地区であった。戦後は一般の労働者・学生が低家賃にひかれて大量に流入し、もはや閉ざされた地域ではなくなっているが、戦前軍部によりいわれなき弾圧を受け、これに抗して闘った部落指導者の捨て身の戦いを見聞した人は多い。社会党支持者の一部の票は、戦前の指導者の

流れをくむ社会党議員に向けられているもので、この人たちの間にはレジスタンスの気風が根強く息づいている。対象者ではなかったが、老婆が水平社の講演会の飯たきに参加し、合間をぬって講演を聞いた感動や、サーベルをつけた軍人が土足で家に上り、仏壇を捜査して反逆罪をデッチあげ、指導者を目の前で逮捕して連行したという強烈な記憶を語ってくれたが、そこに政治的に目覚めずにはいられない一群の人々を見た。

しかしそれは対象者の一部であって全部ではないし、現代的な問題とはただちにつながらない。つぎにあげなければならぬのは政党の宣伝活動である。

表14は各党の政策を何によって知るかという質問に答えたものである。N・A以外は何らかの回答をよせた者で、二つ以上あげた者がいるので合計は一〇〇%をこえる。男子に多いのはテレビと新聞、女子はテレビ、ついで友人・全生連と新聞である。

テレビはひまつぶしで見ているので当然として、新聞をよむのは努力がいる。新聞の種類をきくと、一般紙の他に政党紙を購読しているのが目立った。すなわち赤旗（共産党）日刊紙―特に指示しないものはここに入れた―を購読している者は男子に五〇%、女子に三〇%であり、日曜版（週一回）を加えると男子の六〇%、女子の三三%が政党紙を読んでいるのである。また政党紙としては聖教新聞（公明党）をとる者が、男子に二名四%、女子に三名一〇%みられるが、これはもと公明党支持

者と、現在の支持者を含んでいる。共産党支持に変わった時点では、政党に対する知識を持たなかったとしても、これだけ広く政党紙が読まれていることから考えてその後の学習がすすんでいると思われる。

「若年時・共」が男子に一〇〇%、女子に七五%と赤旗購読率が高いのは当然として、「社・共」も男子一人ぐらしに七七%、家族世帯に一〇〇%とかなり高く、もと社会党を支援していた人たちは政治的関心がたかい。「D・K・共」も男子は八三%に達しており、無投票から共産党支持へ、さらに理論的学習へと急速な進展がみられる。

△決定に際して影響力をもつ媒体▽

これだけ多くの人を共産党支持へと向わせたものは何か。表15は、人では何が影響力を持ったとか、マスメディアでは何か、国体では何かと別々にきいた結果である。これも複数回答があるので一〇〇%をこえるが、なしとあるのは影響をうけなかった人であるから、合計からなしを差引いた数が何らかの影響をうけた人である。

三分類の中で最も影響ありの数が多いのは団体からで、男子では三二名が影響をうけ、そのうち三一名までが全生連だとしている。女子も同様二七名が全生連から影響をうけており、いかに強力な働きかけが行われているかがわかる。また人の場合も、組合・全生連の人と政党の人が多く、新聞は多くの人に読まれてはいるがそれで決定する者は少く、組織による日常不断

知 る 方 法								赤 旗				聖 教	
友人の組合		新 聞		人物で		N・A		日刊紙		日曜版		新 聞	
16	34.8	25	54.3			2	4.3	23	50.0	5	10.9	2	4.3
14	36.8	22	57.9			2	5.3	19	50.0	4	10.5	1	2.6
1	25.0	3	75.0			1		2	50.0	2	50.0		
1	25.0	1	25.0					2	50.0				
7	53.8	10	76.9			1		9	69.2	1	7.7		
1	16.7	4	66.7					4	66.7	1	16.7		
2	40.0	2	40.0					2	40.0			1	20.0
1	50.0												
1	33.3	2	66.7										
2	25.0	3	37.5					4	50.0	1	12.5	1	12.5
1	25.0	2	50.0					3	75.0	1	5.0		
		1	33.3					1	33.3			1	33.3
1	100.0												
12	40.0	11	36.6	2	6.7	1	3.3	9	30.0	1	3.3	3	10.0
11	44.0	11	44.0			1	4.0	9	36.0	1	4.0	3	12.0
2	50.0	2	50.0					3	75.0				
5	62.5	4	50.0					2	25.0	1	12.5		
2	66.7												
1	25.0	2	50.0					3	75.0				
												1	100.0
		1	100.0									1	100.0
		1	100.0										
1	33.3	1	33.3			1	33.3	1	33.3			1	33.3
1	20.0			2	40.0								
1	33.3			1	33.3								
				1	100.0								

表-14 各党の政策を知る方法

		合 計		政 党 を					
				演 説		T・V		政策パンフ	
男 子 合 計		46	100.0	19	41.3	25	54.3	12	26.1
一 人 ぐ ら し	小 計	38	100.0	17	44.7	17	44.7	10	26.3
	若 年 時 ・ 共	4	100.0	2	50.0	3	75.0	2	50.0
	共 の み	4	100.0	3	75.0	1	25.0	1	25.0
	社 一 共	13	100.0	8	61.5	6	46.2	6	46.2
	D・K 一 共	6	100.0	2	33.3	4	66.7	1	16.7
	自 含 一 共	5	100.0	1	20.0	2	40.0		
	社 の み	1	100.0			1	100.0		
	あ り 一 な し	2	100.0						
	D・K	3	100.0	1	33.3				
家 族	小 計	8	100.0	2	25.0	8	100.0	2	25.0
	社 一 共	4	100.0	1	25.0	4	100.0	1	25.0
	自 含 一 共	3	100.0	1	33.3	2	66.7	1	33.3
	自 の み	1	100.0			1	100.0		
女 子 合 計		30	100.0	8	26.7	18	80.0	2	6.7
一 人 ぐ ら し	小 計	25	100.0	7	28.0	16	64.0	2	8.0
	若 年 時 ・ 共	4	100.0	2	50.0	4	100.0	1	25.0
	社 一 共	8	100.0	2	25.0	5	62.5	1	
	D・K 一 共	3	100.0	1	33.3	1	33.3		
	自 含 一 共	4	100.0	1	25.0	2	50.0		
	社 一 公 一 共	1	100.0			1	100.0		
	自 一 公	1	100.0						
	諸 一 自	1	100.0			1	100.0		
	D・K	3	100.0	1	33.3	2	66.7		
家 族	小 計	5	100.0	1	20.0	2	40.0		
	社 一 共	3	100.0			1	33.3		
	D・K 一 共	1	100.0	1	100.0	1	100.0		
	社 一 公 一 共	1	100.0						

マ ス メ デ ィ ア										団 体									
政党紙		TV・ラジオ		ビラ・パンフ		本		な し		全生連		労働組合		創価学会		老人クラブ		な し	
9	19.6	5	10.9	2	4.3	3	6.5	27	58.7	31	67.4	2	4.3	1	2.2	1	2.2	14	30.4
8	21.1	4	10.5	2	5.3	3	7.9	23	60.1	27	71.1	1	2.6	1	2.6	1	2.6	11	
						1	25.0	3	75.0	3	75.0							1	25.0
1	25.0	1	25.0					2	50.0	4	100.0								
5	38.5	3	23.1	2	15.4	1	7.7	6	46.2	11	84.6	1	7.7					2	15.4
						1	16.7	5	83.3	2	33.3							4	66.7
2	40.0							1	20.0	4	80.0							1	20.0
								1	100.0	1	100.0			1	100.0				
								2	100.0	1	50.0					1	50.0	1	50.0
								3	100.0	1	33.3							2	66.7
1	12.5	1	12.5					4	50.0	4	50.0	1	12.5					3	37.5
1	25.0							2	50.0	1	25.0	1	25.0					2	50.0
		1	33.3					2	66.7	3	100.0								
																		1	100.0
8	26.7	10	33.3	3	10.0			13	43.3	27	90.0	1	3.3	2	6.7	3	10.0	2	6.7
6	24.0	7	28.0	2	8.0			13	52.0	22	88.0	1	4.0	2	8.0	3	12.0	2	8.0
2	50.0	3	75.0	1	25.0					4	100.0					1	25.0		
2	25.0	1	12.5					5	62.5	8	100.0	1	12.5						
								3	100.0	2	66.7							1	33.3
1	25.0	1	25.0	1	25.0			2	50.0	4	100.0								
		1	100.0							1	100.0			1	100.0	1	100.0		
1	100.0													1	100.0	1	100.0		
		1	100.0							1	100.0								
								3	100.0	2	66.7							1	33.3
2	40.0	3	60.0	1	20.0					5	100.0								
1	33.3	2	66.7							3	100.0								
		1	100.0	1	100.0					1	100.0								
1	100.0									1	100.0								

表-15 現支持政党をえらぶに当って影響力のある媒体

		合 計		人												一般紙	
				知人・友人		組合の人		政党の人		恩 人		近所の人		な し			
男 子 合 計		46	100.0	6	13.0	10	21.7	6	13.0	1	2.2	1	2.2	25	54.3	8	17.4
一 人 ぐ ら し	小 計	38	100.0	4	10.5	9	23.7	4	10.5	1	2.6	1	2.6	21	55.3	5	13.2
	若 年 時 ・ 共	4	100.0	2	50.0									2	50.0		
	共 の み	4	100.0	1	25.0			1	25.0	1	25.0	1	25.0	1	25.0	2	50.0
	社 一 共	13	100.0			3	23.1	3	23.1					8	61.5	2	15.4
	D・K 一 共	6	100.0			2	33.3							4	66.7		
	自 含 一 共	5	100.0			4	80.8							2	40.0	1	20.0
	社 の み	1	100.0											1	100.0		
	有 一 なし	2	100.0	1	50.0									1	50.0		
	D・K	3	100.0	1	33.3									2	66.7		
家 族	小 計	8	100.0	2	25.0	1	12.5	2	25.0					4	50.0	3	37.5
	社 一 共	4	100.0	1	25.0			2	50.0					2	50.0	2	50.0
	自 含 一 共	3	100.0			1	33.3							2	66.7		
	自 の み	1	100.0	1	100.0											1	100.0
女 子 合 計		30	100.0	3	10.0	10	33.3	5	16.7			4	13.3	11	36.7	2	6.7
一 人 ぐ ら し	小 計	25	100.0	3	12.0	9	36.0	4	16.0			3	12.0	9		2	8.0
	若 年 時 ・ 共	4	100.0	2	50.0	3	75.0	1	25.0							1	25.0
	社 一 共	8	100.0			2	25.0	1	12.5					5	62.5	1	12.5
	D・K 一 共	3	100.0			2	66.7							1	33.3		
	自 含 一 共	4	100.0			2	50.0	1	25.0					2	50.0		
	社 一 公 一 共	1	100.0					1	100.0								
	自 一 公	1	100.0									1	100.0				
	諸 一 自	1	100.0	1	100.0												
	D・K	3	100.0									2	66.7	1	33.3		
家 族	小 計	5	100.0			1	20.0	1	20.0			1	20.0	2	40.0		
	社 一 共	3	100.0					1	33.3					2	66.7		
	D・K 一 共	1	100.0									1	100.0				
	社 一 公 一 共	1	100.0			1	100.0										

情		家 族 制 度							
有 害		よかった		どちらともいえない		よくない		D・K	
4	8.7	15	32.6	15	32.6	14	30.4	2	4.3
3	7.9	13	34.2	12	31.6	11	28.9	2	5.3
		1	25.0	1	25.0	2	50.0		
				2	50.0	2	50.0		
1	7.7	5	38.5	2	15.4	6	46.2		
1	16.7	3	50.0	3	50.0				
		3	60.0	1	20.0	1	20.0		
1	100.0			1	100.0				
		1	50.0	1	50.0				
				1	33.3			2	66.7
1	12.5	2	25.0	3	37.5	3	37.5		
1	25.0	2	50.0	1	25.0	1	25.0		
				2	66.7	1	33.3		
						1	100.0		
1	3.3	19	63.3	5	16.7	3	10.0	3	10.0
1	4.0	17	68.0	5	20.0	1	4.0	2	8.0
		1	25.0	2	50.0	1	25.0		
		7	87.5					1	12.5
		2	66.7	1	33.7				
		3	75.0					1	25.0
		1	100.0						
		1	100.0						
		1	100.0						
1	33.3	1	33.3	2	66.7				
		2	40.0			2	40.0	1	20.0
		1	33.3			2	66.7		
								1	100.0
		1	100.0						

表-16 旧い意識との関係

		合 計		義 理 人			
				非常に大切		場合による	
男 子 合 計		46	100.0	31	67.4	11	23.9
一 人 ぐ ら し	小 計	38	100.0	25	66.8	10	26.3
	若 年 時 ・ 共	4	100.0	3	75.0	1	25.0
	共 の み	4	100.0	2	50.0	2	50.0
	社 一 共	13	100.0	9	69.2	3	23.1
	D・K 一 共	6	100.0	3	50.0	2	33.3
	自 含 一 共	5	100.0	5	100.0		
	社 あ り	1	100.0				
	有 一 なし	2	100.0	1	50.0	1	50.0
	D・K	3	100.0	2	66.7	1	33.3
家 族	小 計	8	100.0	6	75.0	1	12.5
	社 一 共	4	100.0	3	75.0		
	自 含 一 共	3	100.0	3	100.0		
	自 の み	1	100.0			1	100.0
女 子 合 計		30	100.0	27	90.0	2	6.7
一 人 ぐ ら し	小 計	25	100.0	2	88.0	2	8.0
	若 年 時 ・ 共	4	100.0	4	100.0		
	社 一 共	8	100.0	8	100.0		
	D・K 一 共	3	100.0	2	66.7	1	33.3
	自 含 一 共	4	100.0	4	100.0		
	社 一 公 一 共	1	100.0	1	100.0		
	自 一 公	1	100.0	1	100.0		
	D・K 一 自	1	100.0	1	100.0		
	D・K	3	100.0	1	33.3	1	33.3
家 族	小 計	5	100.0	5	100.0		
	社 一 共	3	100.0	3	100.0		
	D・K 一 共	1	100.0	1	100.0		
	社 一 公 一 共	1	100.0	1	100.0		

の世話役活動（困ったこと、悩みごとすべてにこたえている）と宣伝が大きな力を持っている。大衆活動の基本原理はやはり世話役活動から出発するといえそうである。

また、前の表14に演説により政策を知るといふ人がかなりいたが、この地域から衆議院に立候補している諫山議員は、不特定多数の国民に共産党を知ってもらうには街頭演説にまさるものはないとして、短い演説を一日三〇回のノルマで自らに課しているが、彼の街頭演説に耳をかたむけ、自分の経験を理論化した人は多い。苛酷な体験を持つ人たちであるだけに、大地に水が浸み込むように「なるほどなるほどよくわかる」といっていた。

六、選択にはたらく生活意識

△義理人情と家族制度▽

この設問を考えた時には、旧い意識が革新政党支持の障害になるのではないかと考えていた。しかし表16にみるように、義理人情は圧倒的に「非常に大切」なものであり、それは「若年時・共」でさえそうである。「有害」と答えた者は男子に四名、女子に一名のみであった。これは一つには義理人情の概念が時代と共に変化してきており、昔は義理のために多くの人が泣かされたが、その記憶は失われ、義理と人情が一体となって現代

人が失いつつある旧き良きものとして肯定的にとらえられているように思われる。「若年時・共」の一人が「本質的な人間関係としては時代をこえて大切にすべきものだ。ただ悪用するのはよくない」としているのは、その時代的变化をよくあらわしている。したがってこの質問は妥当ではなかったとみるべきなのか、或いは逆に義理人情の生きている地域・階層であるがゆえに、全生連の活動がこれほどまでに支持を得ているのか、判断を下しかねるのである。

家族制度についても同様な混乱がみられる。「どちらともいえない」「よくない」と否定的な答えをした人は男子に六三%いたが、女子には一七%と少なかった。女子には親の犠牲になった人も多かったのに「よかった」と云うのは何故か。それは回答者が別々の世代のことを考えていたのである。つまり否定的な答えを出す人は親を批判し、肯定的な答えを出す人は自分の子供に対する期待と一緒に住んで欲しいという願望をこめて答えているのである。したがってこの質問も適切ではなかった。

質問紙にはなかったが、別に天皇制についての質問も用意してあった。判断に迷ったさいに用いたので全員にきいたわけではないが、きっぱり否定したのは「若年時・共」と「社・共」に若干ただけで、大抵は「天皇はあった方がいい」としている。これらのことを考え合せると、政党の支持とは余り関係がないようである。

△労働組合とスト意識▽

次に革新政党支持を促進する意識として、労働組合についての意見をきいてみた。表17のように男子はほとんど全員が「あるのが当然」と答えており、これは現役時代に組合員であったかどうかを問わない。下層労働者―しかも対象者の場合は職人や名目的自営業を含む雑業層であるのに、こう答えられるのは全生連に入ってから組織活動に教えられたためであろう。この会長は、生活保護は慈悲や恩恵でいただくものでなく、闘ってかちとってくるものだということを教えるために、対市交渉には会員を極力参加させている。組織の力を教え階級としての自覚を持たせるためだとしているが、ここにあらわれているのかも知れない。

次にストに対する意見をきく際に、ストの経験の有無によって分けた。Aのストの経験のある者は男子に三九%、女子は一三%で少い。この「経験あり」のうち、積極的に参加した者は男子一八名中一二名、女子四名中三名でかなり多い。これとBのスト「経験なし」のうちストに賛成の者を加えると、スト支持者の数がえられる。男子では二三名五〇%、女子では八名一七%が積極的支持者である。またAの労組の「決定に従った」だけの者と、Bの「場合による」者を加えると消極的支持者がえられるが、男子には四一%、女子には二七%である。

いま男子の積極的支持者をみると「若年時・共」には七五%、「共のみ」五〇%、「社・共」六九%、「D・K・共」六七%、

「自含―共」二〇%であるから、この意識は政党支持と相関がたかい。生保受給以前に社・共支持者であった者は、労働運動やストの経験の中できたえられた人たちであろう。これと対照的に「自含―共」「社―公―共」「自―公」「諸―自」など自民党や公明党支持者だった者は、「反対」又は「場合による」が多くなっている。

△生活保護意識▽

働けるうちは働き、社会に貢献したのであれば、傷病・老令によって生保を受けることは当然のことであり、決して卑下すべきことではない。しかし資本主義社会では劣等待遇の原則で扱われるため、肩身の狭い思いをする者は多い。

表18をみると、肩身が狭いとする者は男子に四六%、女子に六七%と女子の方になり多い。逆に権利であるとする者は男子に多いが、それを理論化しえた者は半数で、あとは働こうと思っても働けないので諦めて権利だと思ふようになった者と、答えられない者であった。肩身が狭いという思いは、理論的にとらえられるはずの「若年時・共」にさえ半数あるのであるから、かなり根強い意識である。

A・ストライキの経験あり								B・ストライキの経験なし									
積極的		決定に従う		不 満		D・K		計		賛 成		場合による		反 対		D・K	
12	26.1	5	10.9	1	2.2			28	60.9	11	23.9	14	30.4	1	2.2	2	4.3
12	31.6	5	13.2	1	2.6			20	52.6	10	26.3	8	21.1			2	5.3
1	25.0							3	75.0	2	50.0					1	25.0
2	50.0			1	25.0			1	25.0			1	25.0				
2	15.4	2	15.4					9	69.2	7	53.8	2	15.4				
3	50.0							3	50.0	1	16.7	2	33.3				
1	20.0	2	40.0					2	40.0			2	40.0				
		1	100.0														
2	100.0																
1	33.3							2	66.7			1	33.3			1	33.3
								8	100.0	1	12.5	6	75.0	1	12.5		
								4	100.0			3	75.0	1	25.0		
								3	100.0			3	100.0				
								1	100.0	1	100.0						
3	10.0					1	10.0	26	86.7	4	13.3	8	26.7	9	30.0	5	16.7
3	12.0					1	4.0	21	84.0	4	16.0	6	24.0	6	24.0	5	20.0
1	25.0							3	75.0	1	25.0	2	50.0				
2	25.0							6	75.0			1	12.5	2	25.0	3	37.5
								3	100.0			2	66.7			1	33.3
								4	100.0	2	50.0	1	25.0			1	25.0
								1	100.0					1	100.0		
								1	100.0					1	100.0		
								1	100.0					1	100.0		
						1	33.3	2	66.7	1	33.3			1	33.3		
								5	100.0			2	40.0	3	60.0		
								3	100.0			2	66.7	1	33.3		
								1	100.0					1	100.0		
								1	100.0					1	100.0		

表-17 労働組合とストに対する意識との関係

		合 計		あるのが 当 然		どちらとも いえない		よくない		D・K		計	
男 子 合 計		46	100.0	43	93.5	3	6.5					18	39.1
一 人 ぐ ら し	小 計	38	100.0	35	92.1	3	7.9					18	47.4
	若 年 時 ・ 共	4	100.0	4	100.0							1	25.0
	共 の み	4	100.0	2	50.0	2	50.0					3	75.0
	社 一 共	13	100.0	13	100.0							4	30.8
	D・K 一 共	6	100.0	6	100.0							3	50.0
	自 含 一 共	5	100.0	4	80.0	1	20.0					3	60.0
	社 の み	1	100.0	1	100.0							1	100.0
	有 一 なし	2	100.0	2	100.0							2	100.0
	D・K	3	100.0	3	100.0							1	33.3
家 族	小 計	8	100.0	8	100.0								
	社 一 共	4	100.0	4	100.0								
	自 含 一 共	3	100.0	3	100.0								
	自 の み	1	100.0	1	100.0								
女 子 合 計		30	100.0	14	46.7	12	40.0			4	13.3	4	13.3
一 人 ぐ ら し	小 計	25	100.0	10	40.0	11	44.0			4	16.0	4	16.0
	若 年 時 ・ 共	4	100.0	4	100.0							1	25.0
	社 一 共	8	100.0	2	25.0	4	50.0			2	25.0	2	25.0
	D・K 一 共	3	100.0			3	100.0						
	自 含 一 共	4	100.0	2	50.0	2	50.0						
	社 一 公 一 共	1	100.0			1	100.0						
	自 一 公	1	100.0			1	100.0						
	諸 一 自	1	100.0	1	100.0								
	D・K	3	100.0	1	33.3					2	66.7	1	33.3
家 族	小 計	5	100.0	4	80.0	1	20.0						
	社 一 共	3	100.0	3	100.0								
	D・K 一 共	1	100.0	1	100.0								
	社 一 公 一 共	1	100.0			1	100.0						

D・K		B の 内 容					
		理 論 化		諦 め		D・K	
		12	26.1	6	13.0	7	15.2
		10	26.3	5	13.2	7	18.4
		1	25.0			1	25.0
		1	25.0	1	25.0	1	25.0
		5	38.5	2	15.4	1	7.7
		2	33.3			2	33.3
		1	20.0	1	20.0	1	20.0
				1	50.0		
						1	33.3
		2	25.0	1	12.5		
		1	25.0	1	25.0		
		1	33.3				
2	6.7	3	10.0	3	10.0	2	6.7
2	8.0	2	8.0	2	8.0	2	8.0
		2	50.0	1	25.0	1	25.0
1	12.5						
1	100.0						
				1	33.3	1	33.3
		1	20.0	1	20.0		
		1	33.3	1	33.3		

表一18 生活保護意識

		合 計		A 肩身狭い		B 権利だ	
男 子 合 計		46	100.0	21	45.7	25	54.3
一 人 ぐ ら し	小 計	38	100.0	16	42.1	22	57.9
	若 年 時 ・ 共	4	100.0	2	50.0	2	50.0
	共 の み	4	100.0	1	25.0	3	75.0
	社 一 共	13	100.0	5	38.5	8	61.5
	D・K 一 共	6	100.0	2	33.3	4	66.7
	自 含 一 共	5	100.0	2	40.0	3	60.0
	社 の み	1	100.0	1	100.0		
	有 一 なし	2	100.0	1	50.0	1	50.0
	D・K	3	100.0	2	66.7	1	33.3
家 族	小 計	8	100.0	5	62.5	3	37.5
	社 一 共	4	100.0	2	50.0	2	50.0
	自 含 一 共	3	100.0	2	66.7	1	33.3
	自 の み	1	100.0	1	100.0		
女 子 合 計		30	100.0	20	66.7	8	26.7
一 人 ぐ ら し	小 計	25	100.0	17	68.0	6	24.0
	若 年 時 ・ 共	4	100.0			4	100.0
	社 一 共	8	100.0	7	87.5		
	D・K 一 共	3	100.0	3	100.0		
	自 含 一 共	4	100.0	4	100.0		
	社 一 公 一 共	1	100.0	1	100.0		
	自 一 公	1	100.0				
	D・K 一 自	1	100.0	1	100.0		
	D・K	3	100.0	1	33.3	2	66.7
家 族	小 計	5	100.0	3	60.0	2	40.0
	社 一 共	3	100.0	1	33.3	2	66.7
	D・K 一 共	1	100.0	1	100.0		
	社 一 公 一 共	1	100.0	1	100.0		

雇				名目的自営業		ブローカー トバク		都市自営業		農 漁 業	
事 務 員		公 務 員									
2	4.3	2	4.3	4	8.7	2	4.3	2	4.3	2	4.3
2	5.3	1	2.6	4	10.5	2	5.3			2	5.3
1	25.0										
1	7.7			1	7.7	1	7.7				
				1	16.7						
		1	20.0			1	20.0			2	40.0
				1	100.0						
				1	38.3						
		1	12.5					2	25.0		
		1	25.0					1	25.0		
								1	33.3		
店員・付添		仲居・芸者		名目的自営業		飲 食 店		家事手伝		な し	
3	10.0	5	16.7	1	3.3	2	6.7	2	6.7	1	3.3
3	12.0	5	20.0	1	4.0	2	8.0	2	8.0	1	4.0
2	50.0	1	25.0								
		2	25.0	1	12.5	1	12.5	1	12.5		
		1	25.0			1	25.0				
1	100.0										
								1	100.0		
		1	100.0								
										1	33.3

表一19 本人が最も長く就いた職業

	合 計		日 雇		雇われ職人		常 作 業 員	
男 子 合 計	46	100.0	15	32.6	10	21.7	7	15.2
小 計	38	100.0	15	39.5	6	15.8	6	15.8
若 年 時 ・ 共	4	100.0	1	25.0	1	25.0	1	25.0
共 の み	4	100.0	3	75.0			1	25.0
社 一 共	13	100.0	6	46.1	2	15.4	2	15.4
D・K 一 共	6	100.0	3	50.0	1	16.7	1	16.7
自 含 一 共	5	100.0			1	20.0		
社 の み	1	100.0						
有 一 なし	2	100.0	1	50.0			1	50.0
D・K	3	100.0	1	33.3	1	33.3		
小 計	8	100.0			4	50.0	1	12.5
社 一 共	4	100.0			1	25.0	1	25.0
自 含 一 共	3	100.0			2	66.7		
自 の み	1	100.0			1	100.0		
	合 計		日 雇		雇われ職人		常・作業員	
女 子 合 計	30	100.0	9	30.0	3	10.0	4	13.3
小 計	25	100.0	7	28.0	2	8.0	2	8.0
若 年 時 ・ 共	4	100.0					1	25.0
社 一 共	8	100.0	3	37.5				
D・K 一 共	3	100.0	1	33.3	2	66.7		
自 含 一 共	4	100.0	2	50.0				
社 一 公 一 共	1	100.0						
自 一 公	1	100.0						
D・K 一 自	1	100.0						
D・K	3	100.0	1	33.3			1	33.3
小 計	5	100.0	2	40.0	1	20.0	2	40.0
社 一 共	3	100.0	2	66.7	1	33.3		
D・K 一 共	1	100.0					1	100.0
社 一 公 一 共	1	100.0					1	100.0

芸人・師匠		各目的の自営		都市自営業 自営職人		農漁業	
2	4.3	6	13.0	10	21.7	8	17.4
2	5.3	6	15.8	9	23.7	6	15.8
1	25.0			1	25.0	1	25.0
						2	50.0
1	7.7			5	38.5	1	77.7
		1	16.7	2	33.3	2	33.3
		3	60.0				
				1	50.0		
		2	66.7				
				1	12.5	2	25.0
						2	50.0
				1	33.3		
1	3.3	2	6.7	7	23.3	11	36.7
1	4.0	2	8.0	6	24.0	10	40.0
		2	50.0	1	25.0	1	25.0
1	12.5			1	12.5	4	50.0
				2	66.7	1	33.3
				1	25.0	1	25.0
				1	100.0		
						1	100.0
						2	66.7
				1	20.0	1	20.0
				1	33.3		
						1	100.0

表-20 本人の親が最も長く就いた職業

		合 計		賃 労 働		雇われ職人	
男 子 合 計		46	100.0	13	28.3	7	15.2
一 人 ぐ ら し	小 計	38	100.0	11	28.9	4	10.5
	若 年 時 ・ 共	4	100.0	1	25.0		
	共 の み	4	100.0	1	25.0	1	25.0
	社 一 共	13	100.0	4	30.8	2	15.4
	D・K 一 共	6	100.0	1	16.7		
	自 含 一 共	5	100.0	1	20.0	1	20.0
	社 の み	1	100.0	1	100.0		
	有 一 なし	2	100.0	1	50.0		
	D・K	3	100.0	1	33.3		
家 族	小 計	8	100.0	2	25.0	3	37.5
	社 一 共	4	100.0			2	50.0
	自 含 一 共	3	100.0	2	66.7		
	自 の み	1	100.0			1	100.0
女 子 合 計		30	100.0	5	16.7	4	13.3
一 人 ぐ ら し	小 計	25	100.0	3	12.0	3	12.0
	若 年 時 ・ 共	4	100.0				
	社 一 共	8	100.0	1	12.5	1	12.5
	D・K 一 共	3	100.0				
	自 含 一 共	4	100.0	1	25.0	1	25.0
	社 一 公 一 共	1	100.0				
	自 一 公	1	100.0				
	D・K 一 自	1	100.0			1	100.0
	D・K	3	100.0	1	33.3		
家 族	小 計	5	100.0	2	40.0	1	20.0
	社 一 共	3	100.0	1	33.3	1	33.3
	D・K 一 共	1	100.0				
	社 一 公 一 共	1	100.0	1	100.0		

七、本人の経歴と親の職業との関係

△本人の最も長く就いた職業▽

この稿のはじめに、対象者の激しい職業遍歴についてのべたが、ここではその中で相対的に長くつづいた職業を求め、政党支持の変化との相関をとってみた。

表19に示したように、日雇と雇われ職人は不安定な雇用で、常雇は一応安定していたとみることができる。また女子の職業分類では、日雇、雇われ職人の他に、店員、付添、仲居、芸者も不安定雇用者である。この大分類によると男子の五四%、女子の六七%が不安定雇用者であるから、特徴を見出すのはきわめて困難である。ただ男子の「自含―共」に農漁業が長かった者四〇%と、ブローカー・トバク師が二〇%いること、男子家族世帯に職人と自営業に長く就いた者が多いことくらいの特徴しか見出せない。

本人の経歴については、この他に生活に破たんをきたした年令、及びその出来事についても考慮したが、明確な相関は見出せなかった。彼らは一様に冒頭で述べたような下層労働者として転々としてきたのであって、その条件は共通しているのであるから、むしろそれ以外の契機と複合して支持を決定したと考えられる。

△親の職業▽

これも本人の親が最も長く就いた職業をあげた。表20をみて

わかるように、親が賃金労働者であった者が早くから革新政党支持者になるとは限らない。農漁業といっても戦前の小作貧農であり、都市自営業、自営職人といっても零細な営業が多いことを考えると、賃労働者との間にどれだけの差があったは疑問である。やはり、彼らは例外を除いて一様に貧しい階層の出身者なのであって、その条件も等しいのである。

ただ学歴では「若年時・共」に大学卒が一名、旧中中退一名、「社―共」に大学中退一名、旧中中退二名、「D・K―共」に旧中卒一名が含まれており、彼らが理論から入っていることは注目してよい。「若年時・共」の二名は、本とシベリア体験、「社―共」の三名は、社会党時代に兄の影響をうけた一名、全日自労の運動を通じて一名、「D・K―共」の一名は本で革新政党支持へと向った者である。

八、おわりに

この報告は冒頭でことわった通り、きわめて限定された対象の投票行動の分析であった。そこから導き出される結論は、そうした限定付きの結論であることはいうまでもない。しかしこのような特徴のある対象について、あれこれの資料が集められることによって次第に一つの傾向が浮び上ってくるであろうし、調査の方法も整備されていくことであろう。

そうした意図で、資料だけを紹介したつもりであるが、しいて結論めいたものを引出すとすれば次の通りである。

一、支持政党の決定に際し、本人の出身階層ならびに本人の生活史は、根深い基盤を形成していると思われるが、直接的な関係はもたない。

二、支持政党を決定、または変更する際には、外部からの意識的な働きかけが作用している。組合活動家の説得、政党新聞の購読、街頭演説など、政党の宣伝活動が直接的な動機になっている。

三、その場合、受手の側に政党の主張をうけいれる態度が形成されていることが条件である。下層社会では、「生活要求と結びついた日常的な世話役活動」によって彼らの信頼を得、実績をあげることなしにいかなる宣伝も浸透しえない。

これに対し高学歴者は、社会主義文献など理論からも入り得る。そこには階層的なちがいがみられる。

四、外から持ち込まれた理論を、自己の体験と結びつけて認識することは極めて困難である。労働運動、全生連の闘争に参加することによって先ず体が覚え込み、その後理論化するというプロセスを辿っている。

五、また下層社会の特徴として、現役時代未組織労働者で且つ定住しえず、投票しえなかった者が、定住と全生連の組織を知って急速に熱心な支持者になる一つのルートが見出された。

六、政党間の関係では、社会党から共産党に移行した者が最も多く、革新政党間の移動が容易であることを示している。その場合、元社会党支持者は、現役時代Ⅱ労組、生活保護受給時代Ⅱ全生連という階層別組合の感覚で加入し、支持政党を変える傾向がつよい。

公明党との通路は意外に狭かった。